九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ビルマ祭祀研究の展開 : ラングーンを読む

高谷, 紀夫
鹿児島大学教養部

https://doi.org/10.15017/2235381

出版情報：九州人類学会報. 16, pp.27-33, 1988-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

ビルマ祭祀研究の展開——ラングーンを読む

高　谷　紀　夫

1.　ラングーンを読む

19世紀後半のビルマの語り部としてスコット（Sir James George Scott）の名前はこれからもきっと忘れられることはないだろう。ビルマ最後の王ティボーの知己を得，またサッカーをビルマへ紹介したことでも知られる彼は英国行政官として王制から植民地支配体制への変動の時代を生き，ビルマ名シュエー・ヨー（Shway Yoe）のペンネームで幾つかの著作を残している。中でも『ビルマ民族誌』は現在においてもビルマ文化研究を志す者にとって避けて通れない情報の宝庫である。

『ビルマ民族誌』にはラングーンに関する注目すべき記述はない。現在三百万人近くの人口を擁し，いま尚膨張を続けるビルマの首都圏の中心は，スコットの在ビルマ当時イギリス植民地経営のセンターにすぎず，行政的中心とはいっても上からの支配のそれでありビルマの人々の文化的中心としての資格はまだ有していなかった。だが現在ではどうだろう。ビルマが独立を達成し行政の母体がビルマの人々の手に戻ってからは，文化的中心としての機能を果たしてきているといって過言ではないだろう。映画，音楽，美術などのジャンルでは流行の源であり，いくつかの面たとえば壺作りなどの工芸面，民族織物などでは他地域の優位を許してはいるものの，ラングーン駅はすべての下り列車の終点であり，ビルマ最大のマーケットとしてのラングーンの地位は他の追随を許さず物資の大集積地となっている。政治・経済などの機能的側面だけではない。人々もさまざまな理由でラングーンに集まってくる。人々を引きつけるラングーンの魅力とは何なのだろう。ビルマの概念的空間構成でラングーンはどんな位置を占めているのだろうか。ラングーンの住民はどんな生活様式と行動様式を身につけているのだろうか。それらはラングーン以外の地方の文化とどのような関係にあるのだろうか。住民自身ラングーンをどう考えているのだろうか。彼らの間にアイデンティティは形成されているのだろうか。問いは尽きない。

私はこれからラングーンを読む作業を始めたいと思う。

ビルマを調査した人類学者のフィールドはいままで村落部に限られていた。従って社会のスケールを考える意味においてもまた習俗の分布を考える場合においても，村落がその単位となっていた。ではラングーンを研究する場合でもいままでの研究手法で展開していいのだろうか。それとも新しい視点の導入が要求されるのだろうか。この研究スタンスに関する疑問は人類学者の目が「都市」なるものに向けられ始めた頃からのものであり，ビルマに限られたことではない。では「都市」とは何だろう。大方の研究スタンスのように「都市」なるものを無批判に前提としていいのだろうかという疑問が私にはある。「都市化」といった場合にも社会の機能面の発達のみがスケールとなって論じられ，区切られた空間に住む人々の意識やアイデンティティはあまり論じられたことはなかったように思う。ある空間が文化的に特異性を帯びていると実証できてはじめてその空間を他と類別しうる空間として認識することができる。「都市空間」はこの過程を経て確定されなければならないと思う。

ビルマではどうだろう。ビルマの場合，イギリスが支配権を掌握していた時代は「都市空間」は支

配階級の住居であり，「都市」と「非都市」の空間区分が社会階層の区分と重なっていたといえよう。では独立以降そして社会主義国家成立以降はどうなのであろうか。私はここでビルマ人の主観的な「都市」に注目したいのである。

本稿をラングーン研究事始として，またビルマ文化研究の新しい視点を模索する試みとしたい。

ラングーンは「都市」なのかそうでないのか。この素朴な問いから始めてみよう。

ビルマ語の表現では，ミョードー・インチェーフムがチェーレッ・インチェーフムと対照的に用いられる。ミョードーは「首都」の意味であり，チェーレッは「いなか，地方」の意味である。後半句は「文化」にあたる。従ってことばのレヴェルでは「首都 — ラングーン／いなか」の区別がある。「都市／地方」の区別はセンサスでも用いられている。1983年センサスによれば〔1983 Population Census 以下同様〕ラングーン管区では68.21％が〔Urban - 都市〕に住んでいると報告され，全国7管区7州のうちで二位のモン州28.16％を圧倒的に引き離している。人口密度においてもラングーン管区は1平方キロメートルあたり390人で，二位のイラワディ管区142人との間にやはり大きな開きがある。ラングーン市の人口密度は同スケールで7,260人である。ラングーンが人口密集地帯としての顔をもっていることは確かである。だが人口密集すなわち「都市文化」へと短絡的に結びつけることには躊躇がある。住民の文化的背景が問われなければならない。残念ながらラングーン市民のアイデンティティに関わるような住民の意識調査がなされたことはない。従って人口統計以外に数字の面で説得力のあるものは手元にはない。本稿ではまずその限られた人口統計のデータから考えてみたい。

2. 人口統計から

ビルマ及びラングーンに関する人口統計のまとまったものは，イギリスがビルマに進出して以降のことであり，センサスは1872年から1931年にかけて幾度か実施された。その結果がパーン（B. R. Pearn）の『ラングーン史』の中に掲載されている。〔Pearn 1939：234，255，287）このデータが第一の資料である。

センサスは第二次世界大戦前後中断し，1948年の独立以降，国内の限られた地域を対象に1953年，1954年に断片的調査が行なわれている。1955年にも調査が企画されたが国情不安定のため中止された経緯がある。本格的な全国レヴェルの人口調査は1973年になるまで待たなければならなかった。1973年センサスによる民族別宗教別人口など，その詳細は公表されていなかったが，1983年センサスの報告の中に，比較資料ということで1973年のデータが言及されている。このデータが第二の資料である。空白が四十余りあるもののこれら二種のデータを比較すると興味深いことに気がつく。それは中国系，インド系など非ビルマ系の人々の比率の変化である。

1931年当時，約12万人のビルマ人に対し，それを上回る14万人余りのヒンズー教徒がラングーンに居住し，イスラム教徒も7万人，中国人も3万人を数えた。ところが1983年になるとビルマ族（狭義のビルマ人）の約206万人（82.1％）に対し，中国人，インド人，バングラデシュ人，パキスタン人などを含む外国人は混血を含めて約30万人（外国人7.4％，混血4.56％）にすぎない。〔Pearn ibid，1983 Population Census〕

前者の資料に関して坪内氏は二十世紀に入ってインド人の割合がビルマ人を凌駕するという編年的

変化を指摘した上で，他の東南アジアの諸都市たとえばシンガポール，バタビア，バンコクなどと比較しながら「都市の多民族性」を指摘する。〔坪内 1986:144〕その多民族的状況が現在のラングーンには稀薄なのである。

さらに子細にみていくと，ビルマ族の比率がラングーンではビルマ全体よりも高い。この点は非ビルマ系諸民族の多くが山岳部に住んでいることを考慮すれば当然といえる。しかもビルマの宗教別人口で仏教徒の比率が約90％であることをあわせて考えれば，ビルマ族の非仏教徒の数はごく僅かにすぎず，ラングーンの町はビルマ族仏教徒の町とほぼイコールなのである。以上のデータを根拠にラングーンの民族的状況及び信仰に関する「均質性」を認めることができよう。しかもその「均質性」は少数民族が多数居住する山岳部を除くラングーン以外の地域でもほぼ同様であることは想像にかたくない。従って「ラングーン／地方」の区分は少なくとも民族的状況，宗教に関する限り，あまり目立たないように思われるのである。現在のラングーンは人口構成に限れば空間としての特異性を帯びていない。

上記の多民族同居状況の背景にはビルマ政府の政策が深く関わっている。1962年の無血社会主義革命で登場したネ・ウィン政権は，1963年に中国人が開設した銀行の国有化を実施するなど中国人あるいはインド人が握っていた経済力の国有化政策を打ち出した。その傾向は1982年の外国人排斥を意図する市民権法で決定的となった。その後も通用紙幣の無効，新紙幣の発行を繰返し，富裕者の財産をそぐ結果となっている。この間ビルマでの経済活動の基盤を失った多くの中国人，インド人は国外へ脱出したといわれ，このことが非ビルマ人の人口比率の減少につながっていることはいうまでもない。

ビルマは政策的にビルマ式社会主義を標榜して独自の路線を歩むなかで外国人及び外国文化の流入，さらに自国人の流出を制限している。このことはビルマ文化を取り巻く状況に深く関係し，その変化にある意味でブレーキをかけているといえるかもしれない。

人口構成の面からは「均質性」が認められるラングーン。ではこの町の文化的状況がどうなっているかを具体的に考えなければならない。

3. 方法論 ―― 祭祀研究から

ラングーンの町はなぜ人口が増加しているのか。1931年当時約40万人だったラングーンの人口が1956年には推定で約76万人，そして1968年にはやはり推定で約172万人，〔Aung Moe 1983〕，1973年には約206万人，1983年には約251万人と着実に増加の道をたどっている。但し，その増加の過程は一様ではない。1956年から1968年にかけての約100万人の増加は，1973年から1983年にかけての年人口増加率が2.02％であることを考えると注目に値する。

いうまでもなく自然増加以外の重要なファクターは人口流入である。ラングーンになぜ人々が集まってくるのかについてはここでは問わない。ここで注目したいのはラングーンに流入してきた人々が享受する文化である。彼らは自分達の出身の文化をラングーンに持ち込んでくる。外国文化の流入が制限されている状況では，地方出身者は外国文化にあこがれたとしても，彼らの享受する文化は少なくとも外国文化に圧倒されることはない。では彼らはどんな生活文化をラングーンで営み始め，そして二世三世に伝えているのであろう。彼らが引用する文化のアイデアは地方の文化にその源泉が求められることになりはしないか。その意味でラングーンは確実に「地方」あるいは「いなか」をひきず

っている。そのひきずり方を考察することに，ラングーン研究のひとつの視点の資格があると思われる。ラングーンには独自な文化空間が展開されているのだろうか。それとも「地方」と相似型の文化空間が観察されるのだろうか。もし観察者の目から見て独自な文化空間が展開されているとしても住民自身はどう認識しているのだろうか，そしてそのアイデアの源泉はどこに求められるのだろうか。以上の問題提起に答える第一歩として比較的文化の明示的な部分であり観察も容易な祭祀を研究対象とする方法論を考えてみたいと思う。

4. ラングーン祭祀研究の可能性

ビルマの祭祀体系及び構造についてはブエという祭祀群を中心にすえて先に論じたことがある。〔高谷 1986〕その際ラングーン周辺を中心的なデータ・フィールドにした。しかしラングーンのみの祭祀というわけではなくラングーン以外の地域の祭祀も念頭においていた。ラングーンの全体像を考えるにはまだデータが少なすぎるため，ここではラングーンで観察されるあらゆる祭祀のうち，特にラングーンでしかみられないもの，あるいはラングーンでとりわけ盛大に行なわれているものを中心にラングーン祭祀研究の可能性について考えてみることにしたい。

その第一の視点は，ラングーン新興住宅地における祭礼研究である。実際に私はある祭りを選んで継続的調査を試みている。その祭りはラングーン市の北東部，インヤー湖の東側に位置するヤンキン・タウンシップで行なわれている28仏祭礼（フナジェッシィッス・パヤーブエ）である。行政的にビルマでは7管区7州の下のレヴェルに全国で314のタウンシップが置かれている。ラングーン管区で39タウンシップ，うちラングーン市が27のタウンシップを抱えている。ヤンキンはそのひとつである。この地区が開発されたのは1950年代に入ってからといわれており，この頃続いて南オッカラッパ，北オッカラッパ，タケタの各タウンシップが開発されている。これら新興住宅地の開発は先に指摘したラングーン市人口増加の過程で注目すべき約100万人の飛躍的増加の時期に重なる。人口流入に伴う住宅不足の打開策としての開発であったことは，想像にかたくない。ヤンキンで28仏祭礼が行なわれ始めたのは1966年のことである。この祭祀の詳細な分析は別稿を用意しているのでここではこれ以上触れないことにする。

ラングーンにはヤンキン以外にも上述の南北オッカラッパ，タケタを始めラングーンの歴史において比較的新しい時期に居住空間となった地域がある。この視点に立つ研究は祭礼の担い手達の出身の文化的背景を参照しながら展開されなければならない。またこの研究はラングーン旧市街の祭礼研究とも平行しなければならない。

第二の視点はその旧市街に向けられる。それはラングーン市内の非ビルマ人地区の祭祀研究である。人口比率の面では二十世紀前半のレヴェルには及ぶべくもない程少ない。しかし中国人，インド人地区は確かに市街の一角を構成している。ラングーン祭祀空間には並存する複数の暦がある。西洋暦，ビルマ暦と並んで祭日を決めるのは中国暦，イスラム暦，ヒンズー暦である。中国系市民はその暦に従って正月を祝う。イスラム教徒はラマンダン明けと並ぶ全イスラム教徒最大の祭りであるイード・アルアドハー（巡礼月第十月の大祭）を行なう。ヒンズー教徒はカールッティカ月の黒半月の最後の日にディヴァーリー灯火祭りを催す。後二者はカレン族の新年と並んでビルマの公的祝日とされ，その制定に政府の政治的配慮が伺われる。第一と第二の視点は，ラングーン祭祀空間の地域区分を目標として

いるのである。

先にラングーンは全体的なイメージとしてビルマ人仏教徒の町と表現しその「均質性」を指摘したが，他方その「均質性」から外れる部分にも注目しなければならないことは言うまでもないだろう。近年，人類学者によるタイのイスラム教徒あるいは中国人街に関する研究が発表されている。比較という面からもラングーン市内の非ビルマ文化の現状について把握しておく必要があるだろう。

第三の視点は，宗教的建築物シュエダゴン・パゴダの祭祀空間としての研究である。ビルマのどのパゴダにもそれぞれ祭日がある。パゴダ祭りはビルマ語でパヤーブエと呼ばれる。シュエダゴン・パゴダのような有名なパゴダになるとそのパヤーブエがビルマ暦の何月にあたるかを知っている人も少なくない。有名なパゴダの祭礼がその地区だけではなく近隣から人々を動員することはシュエー・ヨーの『ビルマ民族誌』にも記述されている。〔Shway Yoe 1910:169〕パゴダ祭りの性格についてスパイロは「パゴダ祭りは楽しくそして色彩豊かなイベントである。数分もかからない礼拝の後，参加者は時間（金）を仮設のバザーや飲食，寸劇の演技の観覧に費やす」と叙述し，ビルマ仏教の快楽主義（joyism）の側面を指摘する。〔Spiro 1970:229-231〕

シュエダゴン・パゴダの祭祀空間としての研究はパゴダ祭りに留まらない。年中行事の折，境内にある多くの集会堂においてラングーン市内の多くの仏教徒グループが主催する読経の会が行なわれるのはシュエダゴンである。シンビューと呼ばれる仏入門式に臨む市内の男子志願者を抱えた一団が，パゴダを守ると信じられている土地の守護神への参拝に訪れるのはシュエダゴンである。どのパゴダにも構造上八角がありそれぞれが一週間の曜日（水曜日は二分）に対応しているが，出生曜日の祠に献花がひきもきらないのはシュエダゴンである。主仏塔の一段高い回廊に男子のみが登壇を許される瞑想空間があるのはシュエダゴンである。こうして参拝の人影は祭日に限らず絶えない。地方の人もラングーンに出掛けてまず行ってみたい場所としてシュダゴン・パゴダの名前を上げることが多いと聞く。換言すればシュエダゴンは祭日などの特別な日に限らず信仰上の関心事となっているという意味で「日常的な信仰空間」としてラングーン市民を始めビルマ国民全体に認識されているといっていいだろう。

ラングーンの町が旧名ダゴンの時代，シュエダゴン・パゴダの門前町として発展してきたことはその歴史で語られている。このビルマのシンボルともいうべきパゴダの祭祀空間はラングーンの発展とも平行して考察されなければならないのである。

第四の視点も，宗教的建築物の祭祀空間としての研究である。僧院は僧侶の修行空間として重要であり，パゴダは仏教徒の信仰の場であり，憩いの場である。ラングーン市内で気がつくもう一種の宗教的建築物はダンマヨンと呼ばれる恒久的な教戒堂である。私の印象でいえば地方ではあまり見られない。地方では勿論ラングーンにおいてもマンダッと呼ばれる仮設の集会所あるいは小屋が，僧侶を招いての法話の会などに使用されることは珍しくない。ダンマヨンはパゴダと同様に非僧侶が管理運営する信仰の場である。だがパゴダがパゴダ祭りのように祭礼のシンボルとなりうるけれども，ダンマヨンはあくまで信仰の場所でしかない。統計的な調査は今後の課題であるが，もし実際にラングーン市内に集中していることが明らかになれば仏教徒の行動様式の重要な一展開とみなすことができよう。

第五，第六の視点は公的機関に関係している。第五の研究対象は，連邦記念日に代表されるビルマ

政府主催の祭礼である。これらの祭礼の祝日は多くが西洋暦に従っており歴史の新しさを印象づける。1月4日は独立記念日，2月12月は連邦記念日，3月2日は農民の日，3月27日は抗戦記念日，7月19日は殉難者記念日でそれぞれセレモニーが行なわれる。例外はダザウン月10日の国民の日である。これら祝日制定の背景には歴史学的あるいは政治学的考察が求められるが，祭祀研究の観点から言って特筆すべきは連邦記念日への政府の力の入れ様である。連邦の旗は全国をリレーされ，ラングーン市チャイカサン競馬場跡の土地に建てられる7管区7州のパビリオン展示は多数の見学者を集め，ステージでは民族芸能，劇，舞踊などが披露される。多民族の連帯を唱うこの大イベントはビルマ文化の現在の脈絡から考えて興味深い特徴を有している。

第六の観点は，祭礼単位としての教育機関の存在に向けられる。まず大学から考えてみよう。ビルマでは現在総合大学がラングーンとマンダレーの二ケ所にあるのみである。その卒業式は大学最大のイベントである。卒業生を持つ家族にとって名誉ある場である裏側では，礼服，送迎の車の手配など生活費のレベルを考えれば，かなり高額の散財がなされ，獲得した学位はスティタス・シンボルとなる。また，大学内には，少数民族文化保存委員会が組織され，民族食の会，伝統芸能披露会が時折催される。

一方，大学だけではなく，各レベルの学校において先生に感謝の意を表すアザリヤ・プーゾープエが年一度慣習的に行なわれる。このプエでは，生徒達が先生方に贈り物をして礼拝をする。学校は校長や他の先生がプエのスポンサーとなって喜捨の参加母体となることもあり，祭祀単位としてあるいは祭祀空間としての学校の存在は今後留意すべき要件をそなえている。

ラングーン祭祀空間を考える第七，第八の視点として，社会階層に関心を向けたい。第七の視点は商売人の繁盛祈願の祭祀研究である。ビルマではナッ（精霊）儀礼が繁盛祈願の目的で行なわれることが知られている。また現世利益に供する祭祀対象がパゴダの境内に人物像としてあるいは小パゴダとして参拝者を集めていることも加えて指摘していいだろう。市場が先の学校と同様に祭祀単位となることも珍しくない。ラングーンのビルマ経済における機能的役割を考えれば，ラングーンの商売人の間で特徴的な祭祀が行なわれている可能性を否定できない。

第八の視点はステイタス・シンボルに関係する場所での祭祀である。その一例は有名ホテルで行なわれる結婚披露宴である。ホテルでの披露宴は政府高官やある程度裕福な人でないとできない種類のイヴェントである。社会階層と祭祀という視点は今後の重要な課題のひとつといえよう。

この他にも各祭祀におけるパフォーマンスの内容についても観察する必要がある。

以上述べてきた考察の可能性は，必ずしもラングーンに限られたことではないかもしれない。だが，ラングーンではビルマのどの地域よりも多様にして多彩且つ多種な祭祀空間が展開していることは十分予想ができ，その細部に渡る分析は欠かせないのである。そして多様な祭祀空間の並存こそがラングーン空間の特異性といえるかもしれないのである。無論，祭祀研究だけがラングーン研究ではない。たとえば，ラングーンの空間論，他のビルマの現在の諸市，あるいは過去の王都プランとの象徴的空間としての比較も試みなければならないだろう。多くの考察を平行してラングーンを読む作業をさらに発展していきたいと考えている。

References

Aung Mon 1983 1983 Census: 228 Years of Yangon, The Working People's Daily Nevember 11, 1983.

Immigration and Man power Department, Ministry of Home and Religious Affairs, The Socialist Republic of Union of Burma

1986 1983 Population Census: 'Rangoon City'

1986 1983 Population Census: 'Burma'

Pearn, B. R. 1939 History of Rangoon, American Baptist Mission Press.

Shway Yoe 1910 The Burman: His Life and Notions, (orig. 1882) Macmillan and Co. Ltd.

Spiro, M. E. 1970 Buddhism and Society: A Great Tradition and its Burmese Vicissitudes, University of California Press.

高谷 紀夫 1986 「PWEの世界 — ビルマ儀礼論」『史学科報告』33: 41 - 54, 鹿児島大学教養部。

坪内 良博 1986 『東南アジア人口民族誌』東南アジア学選書11, 勁草書房。